

# ギヤロン 嘉戎語の絢爛たる接辞の構築を記述して その機能と意味を解析する

長野泰彦著  
ギヤロン  
嘉戎語文法研究



A5判 508頁  
汲古書院  
【本体 12,000円 + 税】

池田 巧

元東京外国語大学教授の千野栄一先生は、よく「未知の言語を調査して、その構造を明らかにする研究こそが、言語学者の仕事だ」と仰っていた。そして「言語学者の研究の目標は、文法を記述することだ」とも。その意味では、この『嘉戎語文法研究』は、まさしく言語学研究的集大成である。しかも専著でありながら、言語類型論の新しい成果を取り入れて解析した記述研究の全貌を、平明な日本語で読むことができ、この言語の目も眩むような絢爛たる構造が、一般読者にもよくわかるように、論述には数々の工夫が凝らされている。

本書の記述対象となった嘉戎語は、ギヤロン語と読む。現代中国語の漢字音訳による表記である（日本漢字音で、カジュウゴと読む習慣はないので注意）。中国四川省北部の阿壩蔵族羌族自治州の、標高三千メートルにもなる山岳地帯に居住

する人々が話すことばで、使用人口は十数万人を数える。民族としてはチベット族であり、中国語では、サブグループ名を冠して嘉戎蔵族（ギヤロン・チベット族）のように呼んでいるが、決して小さな民族集団ではない（ちなみに中国五五の少数民族のうち人口一〇万人未満の民族は二〇を数え、そのうち七民族の人口は一万人未満である）。ただし「戎」の字は偏見を含むため、近年は「嘉絨」という表記も広く使われるようになった。こちらの表記は、華麗な民族衣装の美しさをイメージできる効果もあって、歓迎されているのであろう。

ギヤロンとは、チベット語の rGyal [mo Tsha ba] rong の略で、他称である。自称は、ギヤロン地区の中心をなす馬ル康では、keŋ という。人々の間では、かつて西チベットにあつた女王の支配するシャンシユン国が東遷して、落ち着いた地



ギャロン地区の伝統建築：石造りの望楼（著者提供）

を「Gyal mo rong」[女王の谷]と呼んだ、という伝承があり、『旧唐書』に見える東女国と呼ばれた地域に重なる。ギャロン地区には現在も「美人谷」という所があつて、美女の産地としても名高いのは、こうした伝承から形成されたイメージが大きく影響しているのであろう。

それでは、ギャロン語はチベット語の方言、あるいはとても近い関係にある言語なのか？ という点、必ずしもそうではない。確かにギャロン語にはチベット語と共通する単語が多いけれども、その多くは日本語における漢語のような借用語であつて、基礎語彙（特に用言）はむしろ羌語文と呼ばれる言語グループ多くは二〇世紀になつてから記述調査が進んだ、青海省から四川省西部を経て雲南省へと続く山岳地帯に分布するチベット・ビルマ系の少数言語群に近い。しかし隣接する地域

で話されている羌語とは、日本語と朝鮮語のように、よく似てはいるけれども異なる言語である。ギャロン語を記録する専用の文字はないため、歴史研究には方言の精密な記述分析と、近隣の同系語との比較研究が不可欠である。本書の序論には、ギャロンの民族と言語について、地域の概況・歴史・方言・研究小史が手際よく整理されている。さらにギャロン語を含むチベット・ビルマ諸語の低位分類と系統について、研究史を踏まえた詳細な紹介があり、ギャロン語の位置付けに関する最新の知見を含む諸説が示されている。ギャロン語は、チベット・ビルマ諸語の複数の下位言語グループに亘る文法的特徴を兼ね備えた「繋聯言語」であり、チベット・ビルマ諸語の歴史を探究する上で不可欠の研究対象であることがよくわかる。

本書は1. 序論 2. 音論 3. 形態統辞論 4. 単文 5. 複文 6. 文獻 7. 基礎語彙 8. 参考資料 という構成になっている。その中枢をなすのは形態統辞論（用言と構文）の記述の部分で、品詞ごとに語の用法を例示する。ギャロン語の動詞句は、チベット・ビルマ諸語の中でも最も複雑な構造になっていて、チベット語では痕跡と化してしまつてさまざまな接辞が、ギャロン語では生産的に働いて、動詞の状態と動きを的確に表現しているさまが活写されている。

ギャロン語の動詞構造の特徴をなす接辞とは何か。たとえば英語の動詞 *arrive* には、主語が三人称単数で、現在時制の場合には、接辞の *-s* がついて *arrives* となる。英語ではこうした動詞接辞は限定的（いわゆる「三単現」のときのみ）であるのに対し、ギャロン語の場合には、「到着する」という動詞 *mənda*（非完了語幹 *mə* に自動的動作を示す接辞 *na-* がついた形）に、主語の人称と数に応じて、様々な接辞（の組合せ）がつく。

ギャロン語の「到着する」では、動詞語幹に対して前接辞が二層構造となっており、さらに後接辞がついているのだが、動詞語幹の前に現れうる接辞には五つの階層があるので、動詞構造は P<sub>1</sub>-P<sub>2</sub>-P<sub>3</sub>-P<sub>4</sub>-P<sub>5</sub> 語幹-(s)-S<sub>1</sub> のように定式化できる。

1 人称単数	kə-məndə-n
2 人称単数	tə-məndə-n
3 人称単数	kə-məndə
1 人称双数	kə-məndə-č
2 人称双数	tə-məndə-nč
3 人称双数	kə-məndə-nč
1 人称複数	kə-məndə-y
2 人称複数	tə-məndə-ñ
3 人称複数	kə-məndə-ñ

動詞「到着する」に付く人称接辞

上の表に示した「到着する」の例は [P<sub>4</sub> (人称) P<sub>5</sub> (自動 *na-* 語幹 *nda* S<sub>1</sub> (人称呼応)] の部分に相当する。これに加えて P<sub>1</sub> には話し手の判断、P<sub>2</sub> には時制と相あるいは動作の方向、P<sub>3</sub> には認識の

直／間接性、(s) には過程動詞の完了標識が現れ得る。「到着する」は自動詞だからまだ単純(一)であるが、相手がいて作用あるいは授受関係を生ずる動詞の「叱る」や「与える」は、主語の (1:2:3) 人称と (単・双・複) 数に加え、相手の人称と数が組合わさって、接辞の出現パターンはさらに複雑な様相を呈する。本書九三—一〇一頁には「叱る」「与える」「好く」を例として、その全ての組合せについて例文が示されており、その絢爛たる複雑さには目が眩む。これだけの組合せを丁寧に精査した著者の探究心に圧倒されるいっばうで、この調査にひとつひとつ回答したギャロン語の発話協力者の忍耐には、本当に頭がさがる思いがした。評者も似たような調査を行なった経験があるが、さまざまな組み合わせをしつこく聞いて、うっかり確認のために聞き返そうものなら、発話協力者は混乱して「さっき言っただろッ」と怒り出し、協力を放棄したとしても不思議ではない。いや、それが普通の反応であろう。

本書の特色のひとつが、本文の叙述には「*Acta Linguistica Hahliensia* の罫みに倣い」註を一切付けない、という論述スタイルである。安易に先行研究の分析を引用あるいは参照指示して済ませることをしない、という著者の記述研究に対する矜持が現れていると同時に、ともすれば教科書的に平

# 中国年鑑2018

◎ 好評発売中 ◎

中国研究所 編・発行

明石書店 発売

1955年創刊。現代中国に関する最新・基本情報満載の、一国を扱う珍しい年鑑。

B5判 約500頁

価格：18,000円＋税

◆特集＝〈習1強体制〉長期化へ

共産党第19回大会を経て権力を強化した習近平のもと、中国は混乱する米国のライバルとして存在感を増している。日本にとっても目の離せない中国の現状を理解し、将来を展望するのに欠かせない広範な情報を提供する。

◆動向

政治、台湾・香港・マカオ・華僑、対外関係、経済、文化、社会

◆要覧・統計

国土と自然、人口、国のしくみ、軍事、少数民族、国民経済・国民生活、農業、工業、資源・エネルギー、交通運輸、対外経済、知的財産権、労働、暮らし、社会保障・医療制度、環境問題、NGO・NPO、教育、宗教ほか

◆資料

統計公報、重要文献、主要人事、2017年日誌ほか  
※お問い合わせ・ご予約は  
中国研究所事務局まで

一般  
社団法人 中国研究所

〒112-0012

東京都文京区大塚 6-22-18

TEL: 03-3947-8029

FAX: 03-3947-8039

e-mail: c-chuken@tcn-catv.ne.jp

URL: http://www.chuken1946.or.jp

板な記載になりがちな言語学の専著を読み応えのある書籍に仕上げることに成功している。参照すべき先行研究については、まずレファランスを明示し、そこに述べられている観点や問題点を消化して整理したうえで、言語現実に照らして妥当性を検証しつつ、謎めいた接辞の意味と機能をひとつひとつ明らかにしていく、という論述スタイルを貫いており、あたかもミステリー小説を読んでいるかのような趣さもある。

本書の後半には、基礎語彙一五六七語と、参考資料として、ギャロン語二〇〇例文および日常表現二六〇を収録する。前者はチベット語の教科書に掲載された模範的な会話例文を援用したもので、語順や文法構造がよくわかる。後者は評者が監修した『デイリー日中英3か国語会話辞典』（三省堂、二〇〇六年）をもとに、こなれた日常表現がわかる例文を抜粋

して編集したものである。文法書の例文に取り上げられることは少ないけれども、日常の言語活動に頻用される生きた挨拶表現や、意思・禁止・心情・状況についてのさまざまな表現が記述されている。「会話辞典」のデータの学術利用を許諾してくださった三省堂編集部には、著者に代わりこの場を借りて御礼を申し上げたい（ちなみに「会話辞典」にはiPhoneアプリもあって日中英の音声再生できるので、現地調査に便利である）。付属のCDには、参考資料の例文の音声データが収録されており、記述されたギャロン語の音声を実際に耳にすることができるといえる。巻末のギャロン語形態索引では、用法を把握しやすいように、基礎語彙および付録の二〇〇例文と日常表現二六〇も参照範囲として広く語彙を拾っており、レファランスマーとしての本書の利便性を高めている。

著者は、国立民族学博物館名誉教授で、日本を代表するチベット学およびチベット＝ビルマ言語学の専門家である。二〇一三～二〇一六年度には日本西蔵学会の会長も務められた。一九八三年にカリフォルニア大学に提出した博士学位論文がギャロン語の動詞にかかわる形態統辞論で、以来三〇年にわたるフィールドワークの成果が本書である。その間、これまで数々の国際共同研究や現地調査のプロジェクトを主催し、後進の育成にも貢献してこられた。

昨今は、外国人との連名で／英語で論述した／個別のテーマについての報告論文を／量産するのが、国際性ある活発な学術活動を展開していると評価される傾向にある。著者は英語に堪能で国際的に活躍する研究者でありながら、敢えて本書を日本語で論述し総合的な専著として刊行した。日本語による論述は、英語のスタイルや分析法の枠組みに縛られず、母語による深い洞察と精密かつ自由な論述が展開できる。日本における関連分野の研究者や、言語学やアジアの言語文化に興味を持つ一般読者も、容易に我が国の学術研究の到達点について理解することができ、正確なデータの利用が可能になったことは喜ばしい。これは紛れもなく日本の学術活動の大きな成果であり、「研究成果の公表と社会への還元」のあべき姿勢を示すものであろう。

本書でギャロン語に興味を持たれた方は、ぜひギャロン語方言データベースのサイトも訪れて欲しい。著者の設計になる「みんなくデータベース (Gyalrongic Languages)」(<http://mq.mnnpku.ac.jp/databases/Gyalrong/>) では、八一地点におよぶギャロン語方言の基礎語彙と二〇〇例文のデータを参照でき、音声も聞けるほか、美しい民族衣装と特色ある建築の写真も掲載されている。

(いけだ・たくみ 京都大学人文科学研究所)